
【詩集】もがりぶえ

布袋しぐれ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

【詩集】 もがりぶえ

【Nコード】

N 6 6 5 3 Z

【作者名】

布袋しぐれ

【あらすじ】

布袋しぐれの詩集、第3弾。いつもご愛読ありがとうございます。徒然と心の赴くままに、書き連ねるこの詩集。どうぞお楽しみください。今回も詩集の題は、私の生まれの季語からつけさせて頂きました。

我が儘な愛

そう

初めてじゃない

数え切れない

恋の海

ダイブして

その切なさにもれて

私がサーファーなら

いつになっても

波に乗ることを知らない

素人で

いいえ

分からない

覚えていないくらい

繰り返してる

お遊びめいた

この恋愛を

ねえ誰か

うまいこと並べて

おしゃれなジャズでも頂戴

おまけに思いつきキツイ飲み物を

よく占いで出る

『浮気の恋に燃える』私

占いどおりね

人のモノが一番
良く見える
無いもの強請り
やめたいけれど
どうやらそこまで
私
賢くないみたい

そう
ほしいのは
温かなハグ
何度目の恋かしら
胸の高鳴り
抑えられそうも無いの
そう

こんなに隙を作ってあげているのに
こんなチャンスふらないで
ささげる愛には飽きたから

誰か私を嫌と言うほど
愛して頂戴

温かい季節

夢から

今なら醒めても

後悔しないかもって

いつかのプリンセス

まだ毒のリンゴ

吐ききれないみたいね

こんな季節に

あわてて準備なんかして

もつと早くからするんだったって

どこかのサンタのおじさん

外ではトナカイが待つてる

暇を持て余しているみたいね

赤と緑と白と

派手な色合いにその身を包んだ
街

綺麗なネオンの遠く

幸せな声が聞こえる

そんなに慌てて

流れていく星たち

煌いて光を放って

私もあんなに輝けたら良いのに

星たちに嫉妬してるみたいね

今

街中は温かな幸せに囲まれた
温かい季節

戯言

気まぐれに
呟いて
あなたへの
空虚な告白

いないあなたに
届かない声は
無意味なのに
どうしてこんなに
唇に乘せたい音なんだろう

まるで麻薬のようね
媚薬のような
温かい言葉
ほしい愛もままならないのに
ほしい愛も手に入らないのに
どうして
辛くないんだろう

心にぽっかり開いた穴は苦しくて
痛くって
葬り去ろうと
私の頭

考え付いたみたいね
ああ
まるで人形みたいに

さあ
求めてよ
求めるままに
甘美に
優雅に
時に大胆でふしだらに
舞って差し上げましょ

嘘でいい
憎いあなたでもいい
私に
愛していると
囁いて

聖なる

こんな冷たい
嘘つきピエロみたいな
風に吹かれて
聖なる夜に
生れ落ちる命は
まるで
あなたのような

汚れなき
あの雪のように
しずしずと
綺麗に
降り積もって

こんなに冷たい夜は
まるで冗談だと
告げてみたいに

感傷にひたるためにあるみたいな日
なのに人は
会い
楽しむ
楽しい声
楽しい姿

街中は綺麗に

ペイントされて

キレイじゃないけれど

一人じゃ歩きたくない

関係ないことも

考え込んでしまいそうだから

キレイじゃない

すきでもない

このイヴの日に

願い事はただひとつ

口実

よく言うよ

お前は中々口達者だ

そういうお前もよく言うよ

そうやって酒を飲み交わす

大人たち

上手い事言って

こんなご時勢だから

ちよいと

引っ掛けようっていう

魂胆でしょう

上手いこと言っただな

お前も上手いこと言ってきたんだろう

そういうお前は何て言っただんだ

そうやって言い訳の口実を探しあう

大人たち

どうやって言い逃れてきたのか

ありきたりだけれど

次の口実

しきりに探してる
新しい口実探して

サンタも忘れた
疲れた大人たち
そうね

おねだりするなら
口実を考えてくれるものがないんじゃないかしら

課長に呼び出されちゃって
いや後輩が仕事でな

言い訳口実
たまには正直に

飲みたかったのさ

そういつてもバチはあたらないうんじやないかしら

ディア・パトロン

親愛なるあなたに

叶えたい夢があるの
ひとつじゃない

ふたつ

みつ

数えていたら

多分キリはないわ

小説家になりたい

一番強い射撃の名手になりたい
有名になりたい

世界中をめぐる

それを本にしたい

絵を描いて

アトリエだって持ちたいし

それを画廊に飾りたい

ダンスも好きなの

歌も好き

いつか大きな舞台で

ミュージカルにも出たい

夢がいっぱいあるの
数え切れないくらい

エゴな夢ばかりじゃないわ

いつかあの団体に

莫大なお金を寄付して

名前を名乗らずにおいてみたいわ
かつこいいじゃない

だからそこまで儲けなくっちゃ
頑張らなくっちゃ

初期投資って痛いよね
誰か手伝ってくれない

ねえ

親愛なるあなた

私の才能に賭けてみない

あなたが出し惜しみすることなく
協力してくれるというなら

私はあなたに

私の与えられるもの全てを
差し上げてよ

強く

少しでも

強くありたいと願うのは
少し

悲しいちっぽけな

意地のせいなのだろうか

踏みにじらないで

このまま

私は

私らしく夢を抱いて

歩いてゆきたいの

邪魔をしないで

誰も

許されない

真実は

甘い果実みたいに

人を誘うから

そんな誘いを

人は罪という

罪など無い

あるのは幾多の罨だけ
かかって

落ちて

そして

それを罪と言って

勝手に

悪い扱い

自分勝手にも程があるのよ

抱きしめて

嘘じゃない

こんな世界中

あなただけが本当の強さだと

あなたの背中だけずっと

追いかけてきたのよ

またあのときみたいに

あなたは

ただの踏み台になるのね

ああ

足りないもの

それは

強すぎる

激しい刺激

それがほしい

強くなりたいから

私こそが
最高だと
エンペラー夢見た
愚かな人間だと思えばいい
けれどいつか
君臨してみせる
この強さで
この鋼にも負けない
信念で

まるで記憶のサイクルの中に落ちたみたいな
見慣れた後姿に
胸がドキリとした

名簿につづられた
少し乱れた字
全然予想もしてなかった
知らない人の名に
少し落ち込んだ

この町のどこかに
今でもあなたが住んでいて
再び
会えること
心のどこか
奥深く隅の方で
期待してたの

あまりに幸せ
満たされた日々だったから
頭に張り付いた
この記憶離れないの

初恋の頃

童心に戻ったみたいに
それは綺麗な記憶の底
掘り起こして

懐かしさと共に

こみ上げてくるのは

寂しいな

会いたかった気持ち

今頃

どこかで

元気にしてるんだろうかって

あの頃みたいに

話すことができたらしいのに

初めて好きになって

まるでカーテンの隙間から覗いているみたいに

それは見えづらくって

これが恋というのね

あなたを知って

色づき始めた

13の頃

貪る愛情

ほしいのは
母のような
献身的な愛情ではない

ただ燃え盛る
業火のような
激しい愛

ほしいのは
父のような
間接的な優しさではない

ただ力強く
後押ししてくれるような
そんな光

ほしいのは
恋人のような
お互いを支えあう愛情ではない

ただ火を噴いて
恐ろしいくらいに

この世を抱く自然のように
力強く
真っ直ぐに
素直で
大きな
愛情

飢えている訳じゃない
そう答えたら
これは嘘

愛されたいなんて
誰にでもあるだろうけれど
私はそれじゃ
満足できないまで
麻痺して
飢えて
ただ欲して

愛して
けれど決して汚さないで
愛して
優しく力強い光の中で
そうして私を導いて

きつとよ

蔑まれて
土足で踏み躪られて
この心
挟られて
生きてきたせいね
呪縛していた
私以外の
輝く女たち
裏側はとても醜かったのに
あらま
隠すのがお上手なこと

長らく
無愛想で通してきたわ
私は無愛想で
ちよつと気取った勘違いレディーみたいに

長らく
笑って無かったわね
あなたの前で
私は気取ることなく
ただ他の女と同じように
笑って話して
ねえ
随分変わったみたいでしょ
けれど
私が剥いだのは
他の女たちと私の仮面

後は貪るだけ
準備は出来たの
数多の愛情が必要よ
罌も飴も何もかも
撒いておいたから
もう心配要らないわ

耳を塞いで

声が聞きたい
あなたの声が

燃え上がるような
こげるような
情熱が

この胸に
ときどき

唐突として燃え上がって
焼けるみたいに
痛いこの胸が
騒がしく鼓動を打つ

うるさい

この胸が騒がしい
静かにして
気付かれちゃうんだ

あの人に気付かれそうなほど
騒がしいこの胸が

裏腹に騒がしい
この胸のうちに

私の知っている私じゃないわね
私の知っている私のいつもと違う
キラリじゃないけれど
スキでもない

お願い
静かにして
耳を塞いで
聞こえないフリ
あまりにも必死で
笑えちゃうくらい

耳を塞いで
耳を抱いて
そうして夢を見た

私は耳に針を刺して
針を数え切れなくらい刺すと
頭の歪む錯覚を覚えて
抜かなくちゃ
無意味な夢の中
抗ったけれど
不思議と
中々外れない針に
痛みを覚えて

苦しんだ

心臓がうるさい

鼓動がうるさい

あなたへ向う

この生きている証が
うるさい

蔓延り廃れ

美しくない

面白くない

良いものじゃない

善意じゃない

形が見えない

透明じゃない

ああまるで

嘘つきピエロのみせる

うその世界みたい

何よこれ

同じものに溢れて

どのページをめくっても

ダメ

ダメ

ダメ

それでも芸術家の端くれなの
疑いたくなる

私が憧れた世界は

もつと

妖艶で

美しく

もつと

日本語独特のミステリアスさと

きらびやかさが

あつたはずなのに

蔓延る文学に

落胆する

つまらないなあと

そうして古い書籍に手を伸ばし

ああ

あの頃の言葉は

美しかったと

蔓延り

廃れる文学に

嫌気が差したんだ

抱きしめた光

苦しくて

抱きしめたの

暗い

闇の中で

もう何も

見えないから

まるで そう

目隠ししてるみたい

唄が聞こえる

祝福の唄が

あなたの声によく似た

優しい声

鼓膜の深くに

響くような

優しい

声で

私に囁いて

轟轟

呼ぶ音は

まるで

目を覚ませと

そう 言っているみたいね

苦しくて

息苦しくって

辛く重たい

闇の中

もう全て

終わらせたいから

まるで そう

永遠の眠りを待っているの

眠り姫でもないけれど

たったひとりの

白馬の主

待っているの

あなただけが

光を持ってきてくれると信じて

救い上げてくれると

信じて

チヨコレイト・チヨロン（前書き）

チヨロン・・・韓国語で『』のように』にあたる言葉。発音的には『チヨロン』と『チヨロム』の間くらい。正しくはtyoromくらいですが、『ン』にしました。

つまり意識はチヨコレイトのように（または、チヨコレイトみたいに）

チヨコレイト・チヨロン

せっかく

女の子に生まれたんだから

楽しまなくちゃ

損ってモンでしょ

ファッション

メイク

アクセサリー

毎日

新しい刺激が溢れてて

心地よい

まるで水を得た魚みたいに

すいすい

生きていたい

せっかく

こんなに自由に生きてるんだから

私らしくなくっちゃ

私が勿体無いわ

髪を伸ばして

ダンス

そして射撃に

いっぱい

男らしくたつて
構わない
それはそれで面白いじゃない
男の中なら
どろどろしてないもの

疲れちゃう

女の子

チヨコレイト・チヨロン

甘くて

綺麗で

魅力的だけれど

中身はマシユマロ・チヨロン

そんなに優しくない

何が入っているの

とっても苦くて

辛くて

ああ

見かけに騙されちゃった

噛り付いて

不味くって

女の子

チヨコレイト・チヨロン

たまにはスイーツらしい

女の子に出会っけれど

確立は低くって

チヨコレイト・チヨロン

それほど甘くないの

せつかく

女の子に生まれたんだから
綺麗に着飾らなくっちゃ
私が勿体無い

このまま終わるには

シンデレラも

まだ早いつて

そう言ってるから

チヨコレイト・チヨロン

そんなに甘くない

世の中に抗う為

武装した

チヨコレイト・チヨロン・ヨジャ

生きていく為には仕方ないのよ

チヨコレイト・チヨロン（後書き）

ヨジャ・・・韓国語で女の子にあたる言葉。

SENSEI

先生

初めて口を利いたその瞬間から

先生

ありきたりね

こんな話

後輩たちを乗せた車が

後からついて

ゆっくりと

山道

登って来る

そのハンドルさばき

少し後輩たちが

羨ましかった

好きですよ

そんな言葉

口が裂けても言えないから

頑張って挨拶するだけ

「こんにちは」

それが精一杯

先生

初めて口を利いたその瞬間から

先生

初めてよ

こんなに好きになったのは

純粹な

片思い

このままもう少し

好きでいていいでしょうか

先生

今純粹にこの気持ち胸に

先生

好きだから

あと少し見つめてること

許してね

先生

もう少し

もう少しだけ好きでいさせて下さい

不純物

水にも

油にも

何にも溶けない

何にも混ざらない

まさしく

それ

人間の造りだした

不純物

ふわりふわり

何事も無かったかのように

ふらついて

浮ついて

綺麗で醜くて

分かりやすく捕えやすくて

分かりにくくすり抜けやすい

それはまるで

この世に取り残された

最後の不純物

綺麗で醜くて

それってまるで
血に汚されたダイヤみたいね
そう曇らせて

意味不明

機械仕掛けの

この時代に

ねじの1本でも飛んでくれって
願ってみたりする

不純物は

やがて沈むことを願うんだ

漂うことを忘れる為に

YOU

君は『大丈夫』だと
そう言つて

あのときみたいに
半ば

強制的に

力づくで

この背を押すね

私が倒れそうなの
知ってるの

私が弱いことも
知ってるの

分かつてるフリして
ブチって

ねえ

寄りかからないと

生きていけない

人間だつて

私はそうだつて

知ってるでしょ

君に寄りかかれたら
きつと最高でしょうね
あなたの横に
やがて肩を並べる
女性が羨ましい

本当の愛を
取り逃がしてばかり
馬鹿で
愚かで
疎い私

あのと看みたいに
優しく抱きしめて
私に
優しい声をかけてほしいの
凍えた手を
驚きながらも
ぼやきながらも
ゆつくり温めて欲しいの

忘れられないの
あの日
嫌いだったあなたが
恋しいなんて
まるで笑い話
でも

本当に
忘れられない
あなた

追憶の言葉（前書き）

早期退職された、国語科の先生・・・
色々お世話になりました・・・
随分と前の記憶

追憶の言葉

あの日

あのひと夏で

去った師匠せんせいを

私は中々

忘れられなかった

師匠せんせいに染み付いた

チヨークのにおい

優しく微笑むその姿に

どこか儚さを覚えて

ねえ

どこにも行かないで

辞めないで

そう言えたら楽だったのに

師匠せんせいは行ってしまわれるのね

人は誰しも

生き得る限り

出会いも別れも

経験するけれど

その経験に

必死にすがって

生きていけない

歩き出せない
取り残された”私”

頭のどこかで

身体の中

時計は13のあのときから

止まったまんま

動き出せないんだよ

抱えた思い出

多すぎて

歩き出せない

置いて行つた思い
多くて

抱えきれなくって

歩き出せなかった

手を差し伸べる

優しいあなたも

またすぐに私の目の前から消えて

ああ

すごく遠く

もう背中しか見えない

師匠せんせいも

そんな一人だと

分かっているつもりなのに
どうして
忘れられないのだろう

強く

絶対に負けない
屈してたまるもんかって
そうやって今まで
這いつくばって
一番低いところ

屈辱的な

日常にsay goodbye
もう振り向きもしないから
一番低いあの場所に
もう多分戻らないと思う

気にしないで
私のこと
もっと先に進むつもりよ
邪魔しないで
私の道
行く先憚っても

進めるから
希望もあるし
もう何も怖くないのよ
強くいれる
あなたがいるから

どんなに辛いときも
心にいるあなたの存在で
強くいれる
強がりじゃなく
立ち上がれるたくましさを
あなたが
私にくれたから

見栄張り

ほっそりとした

高く急斜面な

そんなヒールに足を入れて

危うく滑りそうになって

慌ててすまし顔

そんな人

いっぱいいる

ミニスカートから覗く

その足に纏うタイツ

寒いのがマンで

寒そうね

寒いわよ

今日は頑張ったのね

張り切ってみたの

それ新作なの

そうなの

高かったでしょ

まあね　でも奮発しちゃって

けれど足も

すぐにお肉がついちゃって

だから

すぐにダイエットに逆戻り

そうして必死に痩せて

またその足を通す

晒してこそその脚でしょ

晒してこそその見栄でしょう

そのためならば

多分

ガマンは厭わない

だって

女ですもの

渇き

正直

こんなに渇いていると思わなかった

カラカラだった

太陽にあてられすぎてたみたい

熱い

ひりひりと痛むこの渇きは

パリパリに張り付いているみたい

少し文面に目を通す

息を吐いて

落ち着いてから思った

あらま

無駄な思考が頭を占めてるって

満足してないな

渇きが癒えない

苦しくなってくる

だんだんと

ゆっくりと

まるで

砂漠のように

じんわり奪われる満足感

出来ればもう少し

天国の園にいて

満足したまんまでいたかったなって

どこか自堕落な私が呟く

意味もなさげに

けれどはつきりと

本性

馬鹿にしないでよ
指先でつままないで
これは注意じゃなくて
ただの君への
最後の警告

生半可に扱わないで
私は玩具じゃない
少し弄んでポイとか
そんなのしたら
痛い目見るわよ

純粹に求める
愛情くれなくたって
君じゃなくても
もっと素敵な
プレイボーイ
溢れているの

簡単に済ます
片手のラヴ・ディッシュ
愛のフルコース
ときどき必要だから

どんどん過激になっていく
満足できないだけ

こんな片隅

渴いたまんまじゃ

潤いも無意味

渴いていくだけ

片手で弄んで

適当にさよならなんて

馬鹿にしないで

決定権は私に頂戴

いいえ

決定権は私にあるわ

生意気

偉そう

強情

そういう君もそうだもの
人間本来の姿

それが

私

孝行

その二文字

それに収まる言葉なのに

行うのは難しい

いつもいつも

おかげで食っていけるというのに

どうしても辛く当たってしまうときがある

良心が痛む

本心も無いことが口から出てくる

手が足が

震えて

これは悪いことだと拒絶する

難しいね

いつの日かって

約束したね

あなたたちの行きたがっついて

北海道旅行

私がいつか

連れて行ってあげるからねって

無理をして

ガタのきている

父の背中

あんなに小さかったっけ

あんなに細かったっけ

遅しなかったっけ

歳を得ること

最近

怖くてたまらないんだ

孝行って

その二文字に収まる癖して

行うのは至難の業

いつか上手くできるかな

あなたたちのために・・・

パターン

めっちゃ素直になって
吐き出しちゃって
ありえないくらい
素直になって

そうしてあなたと語り合えたらいいのにね

私がずっと話し相手のどこかに触れていないとダメな訳
きつと不安なのかもしれない
どこかに行く気がして
だからよく”誤解”される私を
友人は”そりゃそうよ”って
君は”まあ”って
言葉を濁す

言葉も裸になって語り合えたらいいのに
嘘とか冗談とか
そんなの無視して
そうして生きていけたら幸せ

不安じゃない瞬間なんて無い
怖いんだ
ひとりの時間となにもない時間が

手持ち無沙汰

それだけだったら幸せだけれど

空っぽの心に何か

熱くて苦しいものを流し込んでしまっ

て安心してしまいたい

繰り返していく仕草にちよつと

嫌気もさしながら

これが私だと

私が認める

頑なに

私がぼうつと
喋らなかつたら
悪態つく
そんな見知らぬ
男と女たち

けれど話を始めたら
不思議なマジック始まるの
まるで可笑しな国の
可笑しなゲームみたいに

お世辞じゃないわ
お世辞は結構
話に花が咲いて
いつまでも和やかに

けれど気まぐれなの
私のルール
気まぐれに愛して
気まぐれに愛想ふりまいて
だから私を
人は無愛想で
可愛気のない
ただの女だというの

ニキビっ面

これを笑うとは失礼ね

紛れもなく

親から引き継いだ

厄介ながらも

やっとの共通点だと言っのに

これを侮辱するって

この血筋を侮辱することよ

あなたたった一人に

そんなに多くを侮辱できて

プライドだけ高くって

ブサイクだって

よく言われるわ

けれどそれって

一見さんのお言葉なのよ

お黙りなさい

けれどそれが丁度良いときもあるんだけれど

スポットライト（前書き）

結構、マジな詩です

スポットライト

懐かしい

懐かしい

熱くて眩しいスポットライト

熱すぎて

届かないくらい

この情熱を燃やして

愛おしい

あのひかりよ

今度のステージはソロで立たせてよ

もう永遠にないかもしれない

この大舞台

久々に立った

あのオーディエンス40人だけの

小さい舞台は

この胸揺らすには十分で

久しぶりよ

こんなにときめいてる

高ぶる感情は

まるで質のいい麻薬を貰った中毒者みたいに

打つ前

その寸前みたいに

頭の中
弾けてる
アドレナリン
激しく波打って
素敵に
胸を躍らす

気持ちいい
ステージの上
皆が私を見ている
大好きなんだ
その瞬間が

いつか大舞台で
もう一度舞えたら
歌えたら

私はそこで死んでもいいと願う
最高の一瞬にかけて

スポットライト（後書き）

大舞台・・・立ちたいです
誰か・・・チャンスを！

子供

素直に気持ちを表して

笑ったり

泣いたり

嫉妬したり

怒ったり

そう繰り返す日常に

否定する権利など

きっと誰にもないんだろう

明るく前向きに生きていこうと思う

繰り返す

いろんな人が

私に教えてくれたみたいに

時には拗ねたって

時には我がまま言ってたって

構わないでしょう

だって人間じゃない

押さえつけられる必要などない

社会の柵しがい

表現の海だって

どこへ向いて行ったって構わないはず

自由でいいの
自由がいいの
だってまだ子供だから

言い訳っぽく
子供っていう単語に
こだわってみる
まだ17の頃

もう一度

私と目が合った瞬間
見つけたみたいなの
ちよつとおどけた顔
一瞬だけだったけれど
私ちゃんと見たんだから

少しだけ遠ざかって
あなたを見ているの
不釣合いな子供だもの
近寄れないの

あなたを見つめると
苦いチョコレート初めて食べたときみたいなの
複雑な気持ちになるの

あなたの前で
綺麗でいたいと思うけれど
ニキビなんて消えやしないし

こんなときだけ
母親譲りの肌がちよつと
憎たらしい
お母さんには内緒の話

あなたの視線の中に
私がどうかいてほしいって
ときどきスルーしていく
あなたの視線の先

幾ら大きいからって
目くらい合わせてくれないじゃない
まるで視界に入っていないみたい

あいさつしても
ときどき見えてないの
知らん振り

幾ら大きいからって
そんなの許せないから
視線をかわさないでよ

難しい
あなたを見つめることも
こんなに離れてちゃ
もう手遅れかもね

だからもう一度だけ c a l l m e

こつちを向いてほしい

どんなお姉さんと

幸せゴールインしようと構わないから

一度だけ k i s s m e

一瞬だけ

あなたの時間くれませんか

どんな結果でも構わないから

もう一度 s h o w y o u

あなたへの一瞬

最高の時間を下さい

ホントに些細で構わないから

思わせぶりは N o T h a n k y o u

はにかんだ笑顔より

一瞬の肯定的な愛が

ただひとつほしいだけなのよ

片思い

片思いって

独りでいる時間に

あなたを考えてることだって

いつかの流行歌

それを教えてくれたよ

いつまで経っても

冷めない本当の熱に

これが片思いって

知ったと思う

あなたが好きで

一番 call I love you

呟くのは慣れたんだけど

あなたを目の前に

言えない I love you

いつまで経ってもうるさい心臓

あなたに言いたいのは

ただ一言 call I love you

もうタイプミスもしないほど打つたよ

送れないただ一言
軽い話くらいしか
したこと無いから

いつかいえたら
この片思いから抜け出せるのかな

C r u e l l o v e

T h e f l o w e r s b l o o m

今しか咲き乱れない

このときに

何に渴いて

何に飢えて

こんなに綺麗に咲かないんだろう

開けない T i g h t b u d

温かい両腕もなければ

咲いても見てくれる人すらいなくて

何を求めて

何を欲して

どうして美しく咲けないんだろう

想像以上に渴いた

T h i s s e c r e t g a r d e n

H o n o r t h e s w e e t s m i l e

今近づくと

M o r e s e c r e t s o f y o u r i m a g i n a t i o n

冷えたその両腕で

抱えあげてみて

重たい水のしたたる

秘密のそれは

あなたの抱えきれない

嘘と本当を纏った

The last flower for you

棘も何もない

甘い香りをたたえた

Cruel love

まわりついて

あなたの鼻の奥

このにおいのこびりつく様に

忘れられないように

見えない棘で

がんにがら
雁字搦め

痛くないように

Cruel love

ただ優しく

表裏の愛

ただ Cruel love

本当の愛

Beep **m**e **g**ently

The brutal Shining

This excitement

Heck, who can quell

I want

Nobody knows

My real excitement

This embraced the heat

Never be healed without

Without telling anyone, and
his excitement that someone

Trigger its shape

Do not treat the most

The most important witness

This maybe I

ad Progress continued on this ro

But no such mistake

Including but no regrets

Certainly heat

Beep me gently

S p e a k w i t h a n y o n e (前書き)

多分、近々、この詩集も閉めて・・・新しいのに入るかな・・・？

Speak with anyone

誰も立ち止まらない

道の端

私が今喋っていること

耳を傾けて

正統派のおしゃべりなんて

退屈

つまなくて

Not 刺激

嘘めいた その言葉ならべに

丁度嫌気もさしてたところよ

耳塞いで

この音楽を頭の中

ジャンジャン掻き鳴らして

ほらめいいっぱい

あんたの頭ん中

可笑しくなっちゃうくらい

皆黙って

この音楽にただ酔って

ただ狂って

バンバン踊り明かしちゃおうよ

このまま夜が過ぎても後悔しないくらいに

高いヒール
見栄張って
足が疲れても
脱がないで
そのまま踊り明かしちゃおう
このまま朝を迎えちゃおう

黙ってディスコ
あなたこそが
今宵のクイーン
痛々しいくらい
剥がれた化粧
誰の為でもない
仮面を脱ぎ去った証拠

本当のあなたは
あなたのためだけに存在してんだから
縛られないで
黙って
皆
自由に過ごして

黙って

エグいつて何よ
何様のつもりよ
使いこなせない
不自由に日本語
履き間違えて

その口先を
塞いでやりたいわ
つまらない事ばっか言つて
結局 馬鹿は丸出したもの

その口閉じて
この命令聞けないなら消えて
どうでもいいじゃない
黙ることすら忘れたの

絶えずその動く唇に
嫌気が差すわ
虫唾も走る
気持ち悪い

エグいつて何よ
何のつもりよ

頭の弱さと居眠りしか
脳に無いようなあんに
言われたくもない

エグいつて何よ

あんたの話す

その残念な日本語のほう
がよっぽどエグい

喋るなら

もう一度出直してきて

C e n t e r o f f a v o r

遺伝子のたった

XとYに隔てられて

たったそれだけの為に

別けられたふたり

分別は必要なの

私は仮にあなたが女でも

あなたは仮に私が男でも

お互いに選べるのかしら

恋愛時代の終わった今

” 良き友人 ” として

お互い肩をあわせて

並び歩く

他人がいくら冷やかそうと

何を言おうと

そんな関係はもう終わった

あの日

あの感情の冷めた日から

あなたは私を” 友達 ” の括りに入れる
私もあなたを” 友達 ” の括りに入れる

何気ない会話をしたい

どうでもいい話を

繰り返す

朝の訪れるたびに

そのいつときに賭けてみる

そして家を出る

恋愛時代の終わったその日から

あなたは私の中で中心になるんだ

I t s t a r v e s o n e s e l f o f l o v e .

まるで喉の奥

ヒリヒリ渴くみたい

次から次から出会う

その異性に

すぐに目をつけてしまうから

M a r r i e d p e r s o n

M a n w h o h a s h e r

C l a s s m a t e

S i n g l e m e n . . .

私に見境など存在しなかった

” 彼氏 ” を得てしてもなお

私の渴きは止まらない

執着心など

いつも ” 彼氏 ” のポジションに持てず

物色し続ける毎日

お買い物中毒みたい

”愛してる”その形っているあると思うし
”彼氏”が”愛してない”わけじゃないってこと
分かっていたのに
けれど耐えられなかったの
物色を続けて
まるで薬物中毒者みたいに

なんでこんなに飢えているんだろう
可笑しい
可笑しい
可らしい

分からないサイクル
生きているうちに
何人の人が必要とするんだろう
けれど
愛してもらわなくちゃ
苦しくなるくらい思いつきりの愛で
私は正常に生きていけない

It starves oneself of love . (後書き)

思った以上に生々しい・・・

タイガーアイズ

綺麗な

まるでタイガーみたいな

瞳の色した

あの人に

もしかしたら

もしかすると

惹かれてるんじゃないかって

どこかで

恋のリーダー反応してるってことに

気付いて

私が恋をしなかったら

それは心臓が止まる瞬間

ときめきの感覚が忘れられないのか

あの緊張感がやめられないのか

すっかり片思いから両思いへの

移行期の

中毒になった私

とりこになったのは

私一人だけれど

確実に

誰かを巻き込みたいのは

本能のようね

うずく

頭の中

あのタイガーアイズ

もっと焼き付けて欲しいって

もっとこっちを見て欲しいって

無いもの強請り

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6653z/>

【詩集】もがりぶえ

2012年1月12日18時53分発行